



プロフィール

1956年新潟県生まれ。1978年千葉大学理学部を卒業し、1983年に大阪市立大学大学院理学研究科でブナ林の研究により、理学博士の学位を取得しました。その後、1985年に森林総合研究所（当時は林業試験場）研究員として採用され、1992年に国際農林水産業研究センター（当時は熱帯農業研究センター）主任研究官、1994年には再び森林総合研究所主任研究官、1995年に京都大学生態学研究センター教授、2001年に総合地球環境学研究所教授を経て、2006年4月より現職についています。この間、2003年に日本林学会賞、2004年に松下幸之助花の万博記念賞（「東マレーシアにおける熱帯雨林生態研究チーム」として団体受賞）、2007年には緑の学術賞を受賞しました。

研究内容

◇森林と生物の生態を探究

大学院生の頃から、日本および東南アジアの森林の世代交代（更新）やその動態を研究してきました。特に、原生林といわれるような数千年も保たれてきた森林では、大木が倒れたり枯死したりすることで林冠（森林の天井に相当する部分）の一部が壊れ、光が林床に達して稚樹の生存率や成長速度が上がることにより、森林が更新していくプロセスが重要であることを明らかにしました。また、天然林の動態を明らかにするための長期的研究をリードし、数多くの研究者と共同で、多様な樹木が森林内で共存できる仕組みを明らかにしました。

マレーシアのランビル国立公園においては、熱帯雨林に高

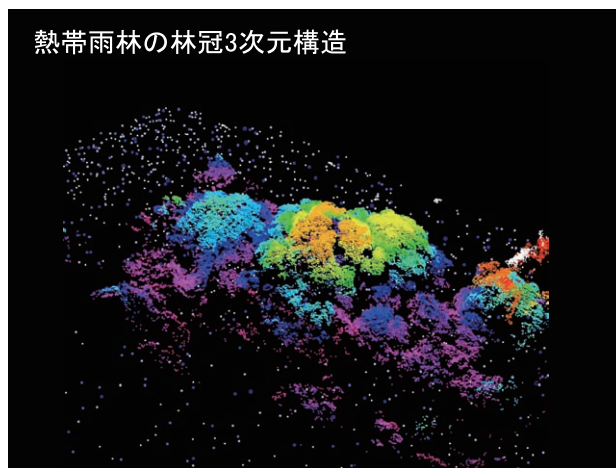
さ80mのクレーンを建設し、林冠で生きるさまざまな生物とその生態や熱帯林の働きに関する研究を進めてきました。東南アジアの熱帯雨林は、数年に一度だけたくさんの樹木が一斉に開花しますが、それが起こるメカニズムや、一斉開花したときの生物と生物の相互作用を明らかにしました。これらの研究は、熱帯雨林が抱える膨大な生物多様性の利用や保全のために、持続的な森林利用の研究へと発展しつつあります。

2008年に採択されたグローバル COE プログラムでは、大きく変化しつつある地球環境に対して、生態系が本来持つ適応力を生かした対策をとるための研究や、それに必要な人材育成を計画しています。



マレーシア連邦サラワク州に建設した林冠クレーン

熱帯雨林の林冠3次元構造



メッセージ

◇多様性を認め、特有性を見極める能力を鍛えてほしい

最近の科学は、ひとつの原理で多くのことを説明できるような「一様性」を追及することが多いですが、「多様性」は生物学だけでなくいろいろなところで重要な意味をもっています。生物でも工業製品でも、同じ機能を持つものが一種類だけということとはほとんどありません。携帯電話が一種類しかなかったら、夕飯がいつもごはん味噌汁だったら、日本中どこにいても同じお土産しかなかったら…。多様性のない世界は、いろいろな働きを失う可能性もありますし、生活に潤いもなくなります。そうした多様性の世界を見直そうということが、私の最近の研

究でもあります。

若い頃は、いろいろな場所の森を見て歩く毎日でした。どこかの森も同じようできて同じでない。その場所にはその場所特有の森があることに、驚く毎日でした。多様性を認める能力、ある地域に特有のものを見極める能力というのは、現代人がだんだん失っている能力かもしれません。でも、実はそういう多様性認識能力というのが、これからの環境問題の解決に重要な意味を持っていると私は思います。ぜひ、その能力を鍛えてほしいと思います。